



ベルギー滞在5年を振り返って

あらい つとむ
新井 力

連合ヨーロッパ事務所・所長

ブリュッセルに居るとEUとヨーロッパの労働運動の動向を追うことがどうしても中心になる。ベルギー国内の動きに無頓着なわけではもちろん無いが、求められるニーズはどうしても偏ってしまう。事務所を訪れる代表団や調査団の関心事項も同様である。私の事務所がある国際労働会館には、イギリスやフランス、イタリア、オランダ、デンマークなどヨーロッパのナショナルセンターが事務所を置いているが、彼らの関心はやはりEUの動向であり、EC（欧州委員会）へのロビーイングである。

ベルギーは、小さくて、そして美しい国だ。人口100万のブリュッセルからパリやロンドンへ出ると、大都市の中で気圧された感じを受けるほどである。フランスやドイツ、ルクセンブルグの国境（これはもはや陳腐であるが）までは、車で走れば1時間半。世界の首都の中で3番目に緑が多い街と聞いたことがある。

私は、ベルギーに若干の負い目を感じながら、あと1週間もしないうちに駐在5年の任期を終えて帰国することになる。引っ越しのためのダンボールが積まれた部屋の片隅でこの原稿を書いている次第である。

2000年8月、私が連合ヨーロッパ事務所に着任してからこの5年間、EUは高揚から自省へと大きなうねりの中にあっし、ニューヨークの9

11爆破テロからはじまったイラク戦争では、所謂「古いヨーロッパ」（戦争に反対したドイツやフランス）とアメリカの間にかけてない軋轢が生まれた。私はこの5年間、ヨーロッパの大きな歴史的場面に居合わせたのであろう。

国境を越えた共通の通貨。その可能性について、当初は半信半疑の人々も多かった。私自身、もう大分以前になるが友人とこの「壮大な実験」について議論した覚えがある。当時は、ブリュッセルに駐在するなどとは想像すらもしていなかったから、それは結構無責任な話として終わったのだが。友人の結論はノー、私はイエスであったことに今は胸をなで下ろしている。このユーロが流通を開始したのは2002年の1月1日からで、大晦日のカウントダウンは、ユーロに参加する12ヶ国ではとりわけ盛大に行われた。ブリュッセルでも、欧州連合旗がはためくサンカントネール公園では、大きな花火が多数打ち上げられた。日本では見慣れている連弾の花火も、ベルギーでは珍しいことであった。

その年の12月には、コペンハーゲンでEU首脳会議が開催され、中・東欧諸国を中心に10ヶ国の新規加盟が合意された。これらの国々は、国内での国民投票など批准手続きを経て、04年5月1日からEUに正式に加盟する事になった。この第5次EU拡大は、新規加盟国数ではEU史上最大で



あり、また、バルカンではロシアと国境を接する。戦後の冷戦構造の中で分断されてきたヨーロッパは、ほぼEUの下に統合されたと言えよう。特筆すべきは、旧ソ連圏にあった国民のEUへの熱い想いであり、それは国民投票で高い投票率と賛成率となって現れた。

この間、「欧州の将来に関するコンベンション（諮問会議）」が設けられて、25ヶ国にまで拡大するEUがより統一性と機動性を持つための憲法草案の起草に当たって来た。「コンベンション」の憲法草案は、2004年10月にローマで「EU憲法条約」として調印され、06年の全加盟国による批准手続きの完了、07年の発効が目指された。

ごく短期的には、恐らくはこの時期までがEUが最も輝いた時であろう。しかし、フランスとオランダの国民投票の結果は、それを一転させるものであった。「EU憲法条約」批准のための国民投票は、フランスでは今年の5月29日に、オランダでは6月1日に行われ、相次いで否決されたのである。両国とも、石炭と鉄鋼を共同管理することにより戦争の惨禍を三度繰り返さないことを誓って生まれたECS（欧州石炭鉄鋼共同体）の原加盟国であったし、その後のEU発展の牽引車であった。フランスの反対55%、オランダの反対62% この結果は、目標としていた条約批准手続きの完了時期を先送りしなければならない程に

衝撃的であったと言えよう。EUは、一步立ち止まって、自省する時を迎えたのである。

仕事柄、ヨーロッパのナショナルセンターの大会に招待されることが多い。私にとって最も印象に残っているのは、2001年ブライトンで開催されたイギリスTUC大会である。この年のTUC大会は、公共部門への民活導入をめぐる組合と労働党政権との対立が深まる中で、「TUC すべての職場を代表する声」をスローガンに開催された。大会2日目の午後には、恒例であるブレア首相のスピーチが予定され、そのスピーチ、「投資と改革のためのアジェンダ」は、首相のベストスピーチの1つと言われ関心が集まっていた。

ニューヨークの航空機テロは、この直前に発生した。首相は、アメリカの惨劇について手短かに哀悼の辞を述べ、直ちにロンドンにとって返さなければならなかった。大会は、働く仲間には多くの犠牲者が出ている中で討議を継続することは不可能として午後の討議を中止した。その後、大会そのものを閉会する事が決定され、黙祷とともに散会した。

このテロの後、ヨーロッパの中で、そしてアメリカとの間でイラク戦争をめぐる軋轢が高まって行くのは読者がご存知の通りである。

連載

かいがい発

第101回

ベルギー滞在5年を振り返って

あらい つとむ
新井 力

連合ヨーロッパ事務所・所長
